菅茶山顕彰会会報

第 20 号
発　行
菅茶山顕彰会
2010年3月1日

茶山墓所（2009.11.3　文化の日）

茶山辞世の詩歌

「黄葉夕陽村舎詩」には二千四百首余りの漢詩が載せられているが、次の詩は、茶山の人生の終止符ともいえる最後の詩である。

「臨終訣妹姪」

身殲固信百無知
那有浮生一念遺
目下除非存妹姪
奈何歡笑永參差

「臨終、妹姪に訣す」

身殲びて固より信ず百て知る無きを。
那んぞ浮生一念の遺る有らんや。
目下除非妹姪を存す。
奈何せん歡笑永く参差するを。

《訳注》遺稿、巻七所収。文政十年（一八二七）、八十歳の秋八月、死期の近きを覚り、身内へ別れを告げた作で、集の巻末に収められ、この臨終詩稿はまた辞世の和歌「うき世とはけふをかぎりにへだつれど人のなさけはわすれかねつも」、「身なければこころもなきはかねてしれどただはらからの名残をぞおもふ」の二首とともに一軸に表装され、現に黄葉夕陽文庫に伝わっている。

妹姪とは茶山の妹で千田村の荒木圃叟の妻好（まつ・みつ）や菅三およびその母敬など、茶山を看取った人たちである。

《大意》この現身が亡びれば、心による一切の認識も消え失せることは十分承知している。どうしてこの世に思いを残すことがあろうか。いまのわたくしは、ただそなたたちをあとにのこすばかりだが、いかがしよう、どうにもできない。お互いともにたのしく語り笑い合うことが永久にできなくなるのを。

（訳注、大意は「新日本古典文学大系66　岩波書店」を参照）

茶山は、文政十年（一八二七）八月十三日、八十歳で病没し、川北網付谷の菅家墓域に葬られた。

昨年の生誕二百六十年（没百八十年）にあたり、顕彰会では、今年から命日の八月十三日を「墓参の日」に定め、関係者で墓参の集いを催した。また、例年墓前祭が行われていた十一月三日には、有志によって墓前に生花が供えられた。